

平江方言韻編『又一経』について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-04-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 張, 盛開 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00026387

平江方言韻編『又一經』について¹

張 盛 開

0. はじめに

『又一經』は韻書の体裁で地方の方言や俗語、ことわざを収集している古い書物である。その性質や中身から見ると、韻毎に分類した平江方言諺集とも言える。ゆえに、本稿では「平江方言韻編『又一經』」と呼ぶ。本稿では『又一經』の内容について、音声（押韻）、語彙、文法などの面から分析し、本資料に見られる平江方言の要素を考察する。最後に本資料の特徴により作者の関連情報を推察する。

1. 『又一經』とは

本資料は故湖南省平江県文史専門家彭以達²氏所蔵のもので、2004年に筆者が彭氏から譲っていただいたものである。全部で71頁あり、前後が欠けているため、書名と作者が不明である。

2009年、筆者はまた彭氏より私版（抄本版）『滋学園又一經』を頂いた。この本と前述のものとは、最初と最後がしっかりそろっており、作者名も書名もはっきりと書かれている。恐らく彭氏が前後の欠けた部分を収集し、更に一冊にまとめたものであろう。この抄本は彭以達氏に頼まれて、平江図書館元館長張長江氏が1カ月かかりで書き写したものである。資料には彭氏による序があり、作者と書名について考察した経緯が記されている。彭氏は本資料の作者は乾隆期の平江県貢生一李映奎で、書名は『滋学園又一經』であるとしている。以下にあげる中国語で記述された先行研究の引用文の日本語はすべて筆者による。

功夫不负有心人，在我十分关注这个残本过程中，陆续又从几处残本中抄录补齐了头尾，并发现有的传抄本称作《韵贯》，有的称作《滋学園又一經》，但都称是李映奎所著。

頑張った甲斐があった。私がこの残本に注目している間、断続的にいくつかの残本が見つかり、欠けていた前後を補充することができた。これらの抄本の名前には『韻貫』や『滋学園又一經』があるが、いずれの抄本も作者は李映奎としている。

彭以達2011：52-53

彭以達氏は『又一經』の序において、本書を下記のように評価している。

映奎先生の方言《韵贯》，看似全是方言土语，但包含了作者对人生的感悟，对人情的练达，对处世的包容。除了用音韵表明平江的方言读音外，还保存了大量方言词语中的字词，而有些字是现代任何字典、词书都无法查到的。确实为平

¹ 本研究は静岡大学人文社会科学部裁量経費I型学部重点・アジア研究の援助によるものである。

代表者：張盛開。研究題目：『平江方言古文献『又一經』研究』。なお、本稿は2017年10月漢語方言学会第19回大会にて報告した内容を元に作成した論文である。本稿の完成は下記の方々のご尽力とご協力があったものである。邢文美氏には001の資料入力をしていただいた。李佳氏には資料の整理にご協力いただいた。張長江氏には抄録時の状況を詳しく教えていただいた。方何春氏には『又一經全集』を貸していただき、作者の情報や中身についてもご教示いただいた。華中師範大学の言語研究所の院生冷菁氏には学会での報告を代読していただいた。胡足夠氏には『又一經全集』の編者探しや中身の確認や解説にご協力いただいた。故彭以達氏には資料を数回にわたり譲っていただき、中身の解説もしていただいた。合わせてここに感謝の意を申し上げる。

² 彭以達（1939-2017）、湖南省平江県城関鎮生れ、高校の国語教員、平江県林業局副局長、平江県政治協会副秘書長等歴任。1998年定年退職後に平江地方の文化や歴史研究に専念する。その業績は著書『古羅文存』、『古羅雜俎』、『古羅叢談』に凝縮されている。

江地方文化的经典之作，故仍以『又一經』名之。

映奎氏の『韻貫』は見た感じでは方言俚諺ばかりであるが、作者の人生への悟り、人間の付き合いの教訓、処世への包容などが含まれている。音韻で平江方言の発音を表すほかに、大量な方言語彙が保存されている。しかもその一部の文字は現代のいかなる辞典や辞書でも見つからないものである。これは確実に平江地方の文化經典と言え、ゆえにやはり『又一經』と名付ける。

彭以達2011：54（下線は筆者による）

黄伝暢編（2011）平江無形文化遺産叢書『平江話』にも「滋学園又一經」を収録している。更に筆者は2017年3月、平江県虹橋出身の方向春氏から抄本版『又一經全集』³を借りることができた。これで筆者の手元には全部で四つの『又一經』が揃った。次節ではこの四つの版について詳細に紹介する。

2. 資料の紹介

本節では各版を比べながら資料の紹介をする。

001 抄本版

句点なし。韻と韻の間に韻を分ける記号白○がある。

前後が欠けており、書名と編者不詳。

002 抄本版、彭以達校正

句点あり、韻目はあるが、小韻を分ける記号はなし。彭以達による序があり、公開に至った経緯と考証の過程が記載されている。

003-印刷版

黄伝暢編2011『平江話』に載っている。韻目あり、小韻の区分け記号がない。

002を底本にしているようであるが、漏れやミスがある。

図に手書きの「○」で囲んでいる所が押韻の合わないものを表す。「>」は漏れを表す。

004 印刷版 方秉謙

序やその他の版にない韻目一覧、續編がある。本文には句点があり、韻目はあるが、小韻の区分け記号○はなし。誤字や別字が多々ある。作者については、序には「流传攸久，作者失考」（長い年月をかけて伝わってきたもので、作者は考証できない）と記載してある。続編は体裁が完全に異なる。韻も踏まないし、韻目で並んでいない。書面語が多く、方言の諺や俗語が少ない。続編について下記のような説明がある。

此书逻辑古今名人名言为「續」又一經。语气中肯。对開啓後贤茅塞。临事抉择取舍。可奉指南。教益菲浅。本人按原书整理毋删。謬悞遺缺莫免。敬希各界读者諒之是序。

本書は古今の名人格言を集め、「續」又一經となる。語気が適格で、後の人々の思想の啓発、有事の時の取舍選択などにおいて指南となる。教訓はとても有益である。編者は原書に基づいてそのまま整理しているため、間違いなどは免

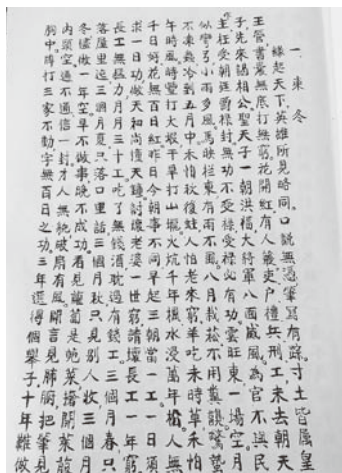
³ 2017年2月末、002の原本を確認するため、筆者は平江に行き、彭以達氏に確認しようとしたが、しかし、その4日前に彭氏はすでに他界されてしまったのである。筆者は抄録した張長江氏に当時の事情を尋ねた。10年も前のことなので、張長江氏も当時の状況ははっきり覚えていないが、彭氏が提供した底本で抄録したものであることは確かである。張長江氏のご紹介により、虹橋出身の方向春氏から方秉謙編『又一經全集』を借りた。3月初旬、全集の原本を確認するため、筆者は平江県虹橋郷大口塚村に行き、全集の編纂者、80代の方秉謙氏を探し当てた。方氏の話によると、全集には原本はあったが、すでに紛失してしまったという。その後、地元の一人から「全集より詳しい原本を見たことがある。それをある老先生に習ったのだ」と言われたが、しかしその老先生もなくなっているため、原本資料の在り処は不明のままであった。筆者は最後まで001を除く原本を見ることができなかつたのである。

れない。各界の読者が承知おきくださるようこの序に記している。

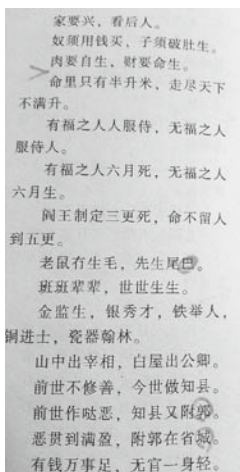
『又一経全集』序



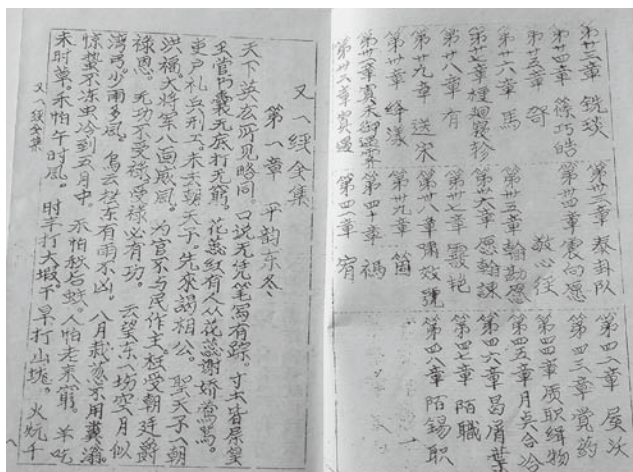
001



002



003



004

下記では各版の対比を行う。

図表 1 四つの版の対比

番号	書名	入手時期	特徴	編著者
001	抄本版 考証不能	2004年	殘本、句点無し 小韻記号あり	不明
002	抄本版 『滋学園又一経』	2009年	完全本 句点あり、小韻記号なし 彭氏による序文あり	彭以達校正 張長江抄録 作者 李映奎
003	印刷版	2012年	002を底本にしている。 句点あり、小韻記号なし 漏れあり	黄伝惕編『平江話』に収録
004	鋼板印刷版 又一経全集	2017年	内容は001より少ない 誤字・別字が多い 続編と韻目一覧ある	方秉謙 編 作者考証不能

四つの版の韻目を対比する。

図表2 韻目対比表

順序	001	002	003	004	声調
1	0	東冬	东冬	平韵东冬	平
2	0	江陽	江阳	江阳	平
3	支微齊	支微齊	支微齐	支微齐	平
4	支虞魚	支虞魚	支虞魚	支虞魚	平
5	佳灰	佳灰	佳灰	佳灰	平
6	真文蒸	真文蒸	真文蒸	真文蒸	平
7	文元蒸	文元蒸	文元蒸	文元蒸	平
8	寒刪覃元咸	寒刪覃元咸	寒朋覃元咸	寒刪覃元咸	平
9	先卦元	先盐元	先盐元	先卦元	平
10	蕭肴豪	蕭肴豪	蕭肴豪	先卦元	平
11	歌	歌	歌	歌	平
12	麻	麻	麻	麻	平
13	庚青蒸侵真文	庚青蒸侵真文	庚青蒸侵真文	庚青蒸侵真文	平
14	尤	尤	尤	尤	平
15	董腫	董腫	董种	董腫	上
16	講養	講養	讲养	讲養	上
17	紙尾語虞齊	紙尾語虞齊	语虞	紙尾虞语齐	上
18	虞	虞	虞	虞	上
19	蟹賄	蟹賄	蟹賄	蟹賄	上
20	軫吻阮	軫吻阮	軫吻阮	軫吻	上
21	早	早	早	早	上
22	潛早阮感	潛早感	潛早感	潛早阮感	上
23	銑琰	銑琰	銑琰	銑琰	上
24	篠巧皓	篠巧皓	篠巧皓	篠巧皓	上
25	哿	哿	哿	哿	上
26	馬	馬	马	馬	上
27	梗迥寢軫	梗迥寢軫	梗迥寢軫	梗迥寢軫	上
28	有	有	有	有	上
29	送宋	送宋	送宋	送宋	去
30	絳漾	絳漾	絳漾	絳漾	去
31	寘未御遇齊	寘未御遇齊	寘未御遇齐	寘未御遇霽	去
32	寘遇	寘遇	莫遇	寘遇	去
33	泰卦隊	泰卦隊	泰卦队	泰卦队	去
34	震問願敬心徑	震問願敬心徑	震問愿敬心徑	震問愿敬心徑	去
35	翰勘願	翰勘願	翰勘愿	翰勘愿	去
36	願翰諫	願翰諫	愿翰諫	愿翰諫	去
37	霰艷	霰艷	霰艳	霰艳	去
38	嘯效號	嘯效號	嘯效号	嘯效號	去
39	箇	箇	个	箇	去
40	禡	禡	马	禡	去
41	宥	宥	宥	宥	去
42	屋沃	屋沃	屋沃	屋沃	入
43	覺葉	覺葉	觉乐	觉药	入
44	質職緝物	質職緝物	质职緝物	质职緝物	入
45	月點合洽	月點合洽	月点合洽	月点合洽	入
46	曷屑葉	曷屑葉	曷屑叶	曷屑葉	入
47	0	陌職	陌职	陌职	入
48	0	陌錫職	陌锡职	陌锡职	入

このように4つの版の韻目を対比してみると、韻目の差異はそれほど大きくないが、重複している韻がいくつか見られる。

例えば：

- 支韻 3、4のそれぞれに存在する。
- 文、蒸韻 6、7、13のそれぞれに存在する。
- 元韻 7、9のそれぞれに存在する。
- 軫韻 20、27のそれぞれに存在する。
- 遇韻 31、32のそれぞれに存在する。
- 願、翰韻 35、36のそれぞれに存在する。
- 陌、職韻 47、48のそれぞれに存在する。

各版における差異はほかにも下記のようなものがある。

8 004版の「寒刪覃元咸」が正しい。その他の版の「朋、刪」は間違いである。

21 すべての版が「早」となっている。その内容は下記の通りである。韻脚として使われている文字は「管、點、晚、欵（款？）、趕、緩、短」等であり、「早」とは韻を踏むことができない。しかし、ほとんど「早」と韻を踏む。ゆえに、ここでの「早」は「早」の誤りと判断できる。

図表3 21早の韻脚

二十一	早	1736	冬至至長夏至至短，小滿不滿芒種不管。	管
二十一	早	1737	六月初一下一點。	點
二十一	早	1738	拍馬窩中搶大碗，天不管地不管。	管
二十一	早	1739	香共一爐，水共一碗。	碗
二十一	早	1740	穿衣喫飯，不犯條欵。	欵
二十一	早	1741	捉到鼻子穿的綫，世人不要皇帝管。	管
二十一	早	1742	掇人碗服人管，不管不管廚中洗碗。	碗
二十一	早	1743	客來打著待，賊來打着趕。	趕
二十一	早	1744	田地有三種三收，功夫有三急三緩。	緩
二十一	早	1745	禾密線頭短，稀禾不稀谷，油上不趕蜡上趕。	趕
二十一	早	1746	會說媒口上趕，不會說媒腳上趕。	趕
二十一	早	1747	公家燒婆家媛。	媛
二十一	早	1748	無水不行船，隔籬窺見碗。	碗
二十一	早	1749	不道學生之愚頑，反道先生之長短。	短
二十一	早	1750	認的秤毛打肉賣，替打死還嫌命短。	短

32 003の「莫過」は誤りで、ほかの三版の「真遇」が正しい。

45 四つの版がすべて「點」や「点」になっているが、ここは入声韻であり、「點」の間違いだと考えられる。

3. 資料の入力と整理過程

資料の電子化には4年（2004年～2007年）近くかかり、その後の整理及び句読点をつける作業は5年（2007年～2012年）近くかかった。

2007年3月より、筆者は電子化された資料を整理し始めた。具体的な手順は下記の通りである。

まずすり減ってはっきり見えなくなった個所を補う作業をした。一部は自分で聞いたことのあるもの

に基づいて補った。ほかのものは文脈によって推測した。

次は原文に句読点をつける作業をした。原文には句読点がないため、全ての句読点を入れていった。その多くは筆者でも初めてみるものであり、文字が欠けているものもある。幸い本資料は韻によって並んでいるため、原書の韻の使用状況に基づき、平江方言で文を分けていくと、だいたい韻を踏む。ゆえに、筆者は平江方言や音韻学の知識に頼って資料全体に句読点をつけることができたのである。それでも処理できなかったものに関しては資料002を参考に句点をつけた。

最後に001の全文（約37,000字）を整理し、その押韻状況を考察した。

4. 考察方向

上述の通り、資料003と004には漏れが多いため、本文での考察は001を基準にする。001の欠けている前後の箇所は002を参考にする。001は全部で約37,000字、2655文に分けられる。48の韻で並べられている。その中で現れた語彙と諺から平江地方でよく使うものが多くみられるため、本資料が韻書体裁をとっている平江方言の諺集であるという彭以達氏の判断を筆者は支持する。

次は下記の四つの点から当該資料を考察し、現代の平江方言とも対照する。

- 方言の諺
- 語彙の使用
- 文字の使用
- 押韻状況からみる音韻特徴

5. 分析

まずは資料の全体的な特徴を考察する。次に文字と語彙の使用状況を分析し、最後に押韻状況から音韻特徴を見る。

5.1. 方言の諺が多い

彭以達氏の言う通り、本資料の全体的な特徴は平江各地方の俗語や諺を多く使用していることである。例えば：

1. 請客莫請女子家，請五十就有一百⁴。

請客不要請婦人家，請的是五十，来的是一百。

客を招く時はおかみさんたちをやめた方がいい。（そうでなければ）招いたのは50人なのに、来るのは100人になってしまう。

これは客を招く時におかみさんたちを招くと、子供を連れてくるので、予定している人数（50人）よりも大幅に増える（100人）ことを指している。

「女子家」とは典型的な平江方言であり、既婚の女性を指す語である。

2. 三個女子家，一乘破風車。

三个妇女抵得上一乘破风车。

⁴ 以下例文を挙げる時は、原文、中国語訳、日本語訳の順番で示す。文中に差別語や差別表現が登場するが、古典であるため原文を尊重し、訳語および訳文もそれに準じる。

おかみさん三人は壊れかけの風車に劣らない。

女性が三人もよれば、劇まで作れるといわれるほど、女性はおしゃべりが好きなものである。三人の既婚女性が集まれば、井戸端会議となり、そのにぎやかな様子は壊れかけている風車の噪音にも遜色ないだろう。

3. 水缸裡淺一寸，餘桶裡滿一尺。

水缸里才淺了一寸，尿桶里却多了一尺。

水がめは一寸（いっすん）減っただけなのに、尿桶は一尺増えた。

女性は水をたくさん飲み、トイレも近いといわれている。「餘桶」とは排泄物を入れる「尿桶」のことで、平江方言でよく使われる語彙である。水がめは普通「尿桶」より大きいので、飲んだ分（水がめ）は一寸（いっすん）しか減っていないのに、排泄した「尿桶」の方は一尺増えるということになる。

下記の諺は筆者が子供の時より聞きなれているものである。

猪脹開，狗脹衰，飯脹死人胚。
未進城門，先思出路。
吃社酒，話社事，千事萬事，不干飯事。
葷不葷，素不素，吞不吞，吐不吐。
碗大約有則，崽大爺難做。
惡龍難鬧地頭蛇，清官難斷家懷事。
娘親舅大，爺親叔大。
吃酒吃一壺，打蛇打七寸。
閉眼吃毛虫，眼不見為淨。
夜飯少噏，世人毛病。
頭上癢到腳上搔，天上話到地下聽。
開定打親，釘定打稱。

三分人才，七分打扮。
元身不健，毛水洗面。
細來偷針，大來偷金。
做賊防狗吠，打屁人心驚。
一粒老鼠屎，打壞一鍋羹。
天上講到地上，南京走到北京。
人要忠心，火要空心。

次は本資料における方言語彙を見る。張盛開（2009）附録には平江各地方言の語彙172の対照表と平江城関方言語彙3000近くがある。本資料にもそれらの語彙の一部が見られる。

5.2. 方言語彙の使用

本節では具体的な用例で『又一経』における方言語彙を分析する。

4. 道起話長，聞起櫛長。

说起的话长，接上的把（接上的谣言）长。

話し出すと長くなり、つなぎた柄（噂話を指す）も長くなる

「聞」は取り付ける意味で、「櫛」は柄を表す。「聞櫛」は元々「農具の柄を取り付ける」という意味であるが、そこから発展して、冗談を言うという意味になった。平江方言において、「冗談言わないで」ということを言いたいときは、「莫聞櫛」と言う。

5. 新小娘得了郎，氣煞伴娘。

新娘子得了新郎，气坏了伴娘。

花嫁は婿をとったが、伴娘（花嫁を介添えする若い女性）は（焼きもちで）頭に来た。「新小娘」とは「花嫁」のことである。女性が嫁ぐことを「做新小娘」（花嫁になる）という。

6. 新小娘進了房，媒人公丟過牆。
新娘子进了房，媒人丢过墙。
花嫁が家に入れば、仲人は壁の外へ捨てられる（もう用はない）。
「媒人公」とは仲人の意味である。
7. 各茶另飯，各酒另漿。
茶与饭分开，酒与浆分离。
茶飯から飯を取り出し、酒かすから酒を絞る。
「各」は別々になるという意味である。「同娘各爷」は異父兄弟を指す。
8. 後生家做事，未嘗不嫩。大丈夫於人，何所不容。
年轻人做事，未尝不嫩，大丈夫于人，何所不容。
若者のやることは確かに未熟なものであるが、立派な大人は何でも受け入れる。
「后生家」とは若い人を指す。
9. 娘親舅大，爺親叔大。
母亲以舅为大，父亲以叔为大。
母親の親戚では、母の兄弟が一番偉い。父親の親戚には、父の兄弟が一番偉い。
「娘、爷」はそれぞれ母、父のことである。
10. 崽呀爺大，女呀娘大。
儿子以父亲为大，女儿以母亲为大。
息子は父親を、娘は母親を尊敬する。
11. 初一崽，初二郎，初三初四女看娘。
初一儿子，初二女婿，初三初四女看娘。
一日は息子、二日は婿、三日四日は娘が母親に会いに行く。

平江各地では特徴的な方言語彙「崽」（息子）、「郎」（婿）、「娘」（母親）「爺」（父親）を使っている。この諺は春節に新年のあいさつをする順番を指している。一日は、息子が親に新年の挨拶をする。二日は婿が義理の親へ挨拶する。三日は娘が母親へ挨拶をする。この順序は普通変更できない。日付は違ってもいいが、順序は守る必要がある。

下記は平江地方の各地で使われる親族呼称語彙である。

図表4 平江各地方言の親族呼称

語例	城関	虹橋	南江	岑川	三聯	伍市
父親	爸爸 paŋ ⁴ paŋ ⁴	爷 ia ¹³	爸爸 paŋ ⁴ paŋ ⁴	爸爸 paŋ ⁴ paŋ ⁴	爷 ia ¹³	爷 ia ¹³
母親	母妈 m ³³ mai ³³	母妈 m ³³ ma ³³	娘 ŋioŋ ¹³	母妈 m ³³ ma ³³	娘 ŋioŋ ¹³	娘 ŋioŋ ¹³
儿子	崽 tsai ³⁵	崽 tsai ³⁵	崽 tsai ³⁵	崽 tsei ⁴²	崽 tsai ³⁵	細仔嘖 si ⁵⁵ ŋa ¹³ tseŋ ⁴

張盛開2009附录：22

「崽」はほかに指小辞としても使われている：「猴崽」(猿)、「猪崽」(子豚)、「妹崽」(女の子)。平江各地では指小辞に「嘖」を用いる。「崽tsai」と「嘖tseŋ⁴」は同じ意味を表す。発音も似ている。

- 868 猴崽拜年，髀骨出向前。
 1588 贈倒妹崽割【尾】，捻住葫蘆扳子。
 1938 雙雙欄裡有瘦牛，黑毛猪崽家家有。

図表5 平江各地方言の指小辞

	城関	虹橋	南江	岑川	三聯	伍市
女儿	女 ny ²¹	女 ny ³⁵	女 ny ³⁵	妹哩 mei ²¹ li	妹哩 mei ²¹ li	妹嘖 mei ²² tseŋ ⁴
舅舅	舅的 c ^h iəu ²¹ tiŋ ⁴	舅的 c ^h iəu ²¹ tit ⁴	舅嘖 c ^h iəu ²¹ tseŋ ⁴	舅爷 c ^h iəu ²¹ ya ¹³	舅嘖 c ^h iəu ²¹ tsiŋ ⁴	舅嘖 c ^h iəu ²¹ tseŋ ⁴
舅母	妗的 c ^h in ²¹ tiŋ ⁴	舅母 c ^h iəu ²¹ mu ²¹	舅妈嘖 c ^h iəu ²¹ ma ³³ tseŋ ⁴		舅娘 c ^h iəu ²¹ ŋioŋ ¹³	舅娘 c ^h iəu ²¹ ŋioŋ ⁵⁵
姑小母	姑姐 ku ³³ tsiau ³⁵	姑姐 ku ³³ tsia ³³	姑姐 ku ³³ tsiau ³³	姑娘 ku ³³ ŋioŋ ¹³	姑娘 ku ³³ ŋioŋ ¹³	大嘖 / 姑嘖 to ²² tseŋ ⁴ /ku ³³ tseŋ ⁴
姨妈	姨嘖 i ¹³ tseŋ ⁴	姨娘 i ¹³ ŋioŋ ¹³	姨嘖 i ¹³ tseŋ ⁴	姨嘖 i ¹³ tseŋ ⁴	姨嘖 i ¹³ tsiŋ ⁴	姨嘖 i ¹³ tseŋ ⁴

張盛開2009付録：23

12. 男子毛時就改坟，女子毛時就改裙。

男人时运不好会改坟，女人时运不好就会改裙子。

男性は運の悪い時に先祖の墓を替え、女性は運の悪い時にスカートを改める。

「毛时」とは運がない、すなわち運が悪いという意味である。

「改坟」とは墓地を改める意味で、平江地方では古来祖先の墓地を替える習慣がある。そうしないと、ご先祖様が落ち着かないだけでなく、自分たちの生活も影響されるといわれている。約20年前までは平江県三陽郷白若村でよく行われていた。これはすでに土葬された人の墓を開き、残った骨を拾い、「金壇」(骨壺)に入れて、ほかの墓地で埋葬するものである。言わば、お葬式のダイジェスト版再現というようなものである。最近では「砌炕」(オンドルを建てる)というような埋葬方式が定着しつつあるため、「改坟」は少なくなった。今までは墓穴を作って、棺を入れて墓を作るものだったが、「砌炕」は棺の空間と棺を入れる口を残して、墓を作る方式である。これは一回で墓が出来上がり、後に亡くなる配偶者の場所を開けておくことができるため、合葬する時も墓を開けなくて済む利点がある。それゆえに手続きが

煩雑な「改坟」の習慣も徐々になくなっていくのであろう。

13. 低頭斫肉，起眼看人。

低头买肉，抬头看人。

肉を買う時は頭を下げる。人を見る時は頭を上げる。

「斫」は切る意味である。田舎では肉屋で肉を買う時に、塊りになっている肉から必要な部分だけを切り分けてもらう。すなわち肉を買うことの動詞に切るを使う。ほかに「斫柴、斫树、斫竹」(芝刈り、樹を刈る、竹を刈る)などにも「斫」が使われる。

14. 頭前有下雷，後背雨不来。

前面在打雷，后面雨不来。

前方で雷が鳴っていると、後方には雨が降ってこない。

「頭前、后背」はそれぞれ前と後ろの意味である。平江の各地で使われる語彙である。

語例	城関	虹橋	南江	岑川	三聯	伍市
前面	頭前	頭前	頭前	前头	頭前	前头
	t ^h əu ¹³ ts ^h iɛn ³³	t ^h əu ¹³ ts ^h iɛn ³³	t ^h əu ¹³ ts ^h iɛn ³³	ts ^h iɛn ¹³ təu ¹³	t ^h əu ¹³ ts ^h iɛn ³³	ts ^h iɛn ¹³ təu ¹³
后面	后背	后背	后背	后背	后背	后背
	xəu ²² pə ⁵⁵	həu ²¹ pei ⁵⁵	həu ²¹ pei ⁵⁵	həu ²¹ pei ⁵⁵	həu ²² pə ⁵⁵	həu ²² pei ⁵⁵

張盛開2009付録：33

15. 野務肥渣，邪巴古弄。

指装神弄鬼。

神がかりになったふりをして人をたぶらかす。

16. 好要成親，脚又转筋。

待要成亲的时候，脚又开始抽搐。

結婚しようという（大事な）時に、足が痙攣してしまう。

17. 痴痴黙黙，去者又来。

痴痴呆呆，去者又来。

ぼうっとしていると、行った者がまた戻る。

5.3. 同義異形語の使用

下記のような語彙は同義異形語である。同じ文の中で、同じ意味を表すのに、異なる語彙を使用している。その原因は重複を避けるためか、あるいは韻や平仄の対応のためなのだろうか。

18では「大根」を表すのに、前半は「萝卜」を使い、後半は「菜菔」を使っている。筆者は「菜菔」を聞いたことがなく、「萝卜」しか知らない。

18. 看見擺葡是菟菜，搯開菜菔内頭空。

看見擺葡是菟菜，搯開擺葡内頭空。

大根は野菜に見えるが、抜いてみたら、中は空洞であった。

「虎」の語彙には「老虫」(19)と「老虎」(20)を使っている。その原因は「田老虎」(20)は慣用的な語彙で、そのまま「虎」だけを「老虫」に置き換えできなかったのだろうか。なお、二十年前では田舎では一般に「老虫」を用いたが、今は「老虎」が多用されているようだ。

19. 得志猫兒雄似虎，先做老虫後做猫。
得志猫兒雄似虎，先做老虎後做猫。
成功した猫は虎のように威張る。虎になってから猫になるのだ。
20. 作田田老虎，作山山霸王。
种田田老虎，种山山霸王。
農家には田んぼが虎であり、獵師には山が霸王である。

5.4. 音韻特徴

本節では本資料の音韻特徴を考察する。前述の通り、本資料は韻書に倣って、諺を集めているものである。全部で48の韻からなり、それぞれ平声14，上声14，去声13，入声6である。ここではまず各句の韻について分析する。全体から言うと、押韻状況には下記のような特徴があり、それも現在の平江方言と共通している。

- 中古でそれぞれ鼻音韻尾 -m, -n, -ŋ で終わる字が互いに押韻している
- 中古でそれぞれ入声韻尾 -p, -t, -k で終わる字が互いに押韻している

図表6 鼻音韻尾 -m -n, -ŋ

韻部	順序	内容	韻脚	韻母
庚青蒸侵真文	1211	芒芒星，雨眼睛，天上不落地下不生。	生	en / aŋ
庚青蒸侵真文	1217	七陰八不晴，九日放光明。	明	in / iaŋ
庚青蒸侵真文	1218	四月不宜四日雨，五月不宜五日晴。	晴	in / iaŋ
庚青蒸侵真文	1219	五月五日晴，疔疾打殺人。	人	ən / in
庚青蒸侵真文	1220	六月三日陰，遍地是黃金。	金	in
震問願敬心徑	2179	夜飯少噎，世人毛病。	病	in / iaŋ
震問願敬心徑	2180	岸上經的三日晒，水裡經的三日浸。	浸	in
震問願敬心徑	2181	山牛野鹿，見者有分。	分	ən
震問願敬心徑	2184	箕裡有金，旁人有稱。	稱	ən
震問願敬心徑	2186	頭上癢到腳上搯，天上話到地下聽。	聽	in / iaŋ
震問願敬心徑	2187	○要的硬，當面掌。	掌	aŋ
震問願敬心徑	2188	開定打親，釘定打稱。	稱	ən
震問願敬心徑	2189	反眼無情，出言無寸。	寸	ən
震問願敬心徑	2190	事在多人，方見公論。	論	ən
震問願敬心徑	2191	一手難度兩頭，一身難擔兩任。	任	ən

図表7 入声韻尾-p, -t, -k

韻部	順序	内容	韻脚	韻母
質職緝物	2470	三七二十一，喉下要的急。	急	iʔ
質職緝物	2471	吃的進，屙不出。	出	əʔ
質職緝物	2472	過的喉嚨要過屎窟，吃打桐油嘔生漆。	漆	iʔ
質職緝物	2473	崽賣爺田，淌來之物。	物	əʔ
質職緝物	2475	○関門酉，點燈戌。	戌	iʔ
質職緝物	2476	前照一，後照七。高打恭，低作揖。	揖	iʔ
質職緝物	2478	莫想相因，討个平值。	值	əʔ
質職緝物	2479	是花帶梗，是肉帶骨。	骨	əʔ
質職緝物	2480	虧眾莫虧一，當面好割漆。	漆	iʔ

入声韻では、入声韻尾-p、-t、-kの区別がなく、現在の平江方言（全部が声門閉鎖音）と同じ状況である。それ以外に、iʔ、əʔがお互いに韻を踏む。下記のaʔ、ieʔも同じである。

図表8 入声韻尾

韻部	順序	内容	韻脚	韻母
月點合洽	2532	討的八角茴香，純是胡椒不辣。	辣	aʔ
月點合洽	2533	心閒蓄的髮，清閒蓄的甲。	甲	aʔ
月點合洽	2534	橫起一尺八，豎起過雙鴨。	鴨	aʔ
月點合洽	2535	油內裡【門身】過不粘油，總落八尺布腹裡八。	八	aʔ
曷屑葉	2537	雨交雪，毛休歇。	歇	ieʔ
曷屑葉	2538	頭九落打雪，九九似六歇。	歇	ieʔ
曷屑葉	2540	三月耙干田，四月秧上節。	節	ieʔ
曷屑葉	2541	處暑白露節，夜寒日裡熱。	熱	ieʔ
曷屑葉	2542	七金八銀，九銅十鉄。	鉄	ieʔ
曷屑葉	2544	魚不養人蝦與蟹，肉不養人腸與血。菜不養人笋與蕨。	蕨	yaʔ
曷屑葉	2545	○兄有子，弟不孤。弟有子，兄不絶。	絶	ieʔ
曷屑葉	2546	是假難扳，是真難滅。	滅	ieʔ

ここまで本資料の語彙資料、押韻特徴について考察した。次は本資料の性質と異なるそれ以外の特徴を見る。

5.5. その他の特徴

5.5.1. 押韻不当

次の表において、同じ韻の中で、u、y、əuʔ、iəŋがそれぞれ存在する。これらは韻が踏んでいるとは言えない。423はおそらく後半を失ってしまったのであろう。484は前後の句の位置を変えたら、韻は踏むが、順序がおかしくなる。一般的に親子が先で、兄弟が後でなければならぬため、ここでは韻が踏んでいるとは言えない。

図表9 押韻不当

韻部	順序	内容	韻脚	韻母
支虞魚	421	踏破鉄鞋無覓處，得時全不費工夫。	夫	u
支虞魚	422	○男子漢大丈夫，一双兩好世間無。	無	u
支虞魚	423	官到尚書吏到督。	督	əuʔ
支虞魚	424	有福之夫不招無福之妻，有福之婦不嫁無福之夫。	夫	u
支虞魚	425	痴人畏婦，賢女敬夫，穿衣見父，脫衣見夫。	夫	u
支虞魚	483	屠户手裡好買肉，秀才門上好教書。	書	y
支虞魚	484	知子莫若父，知弟莫若兄。	兄	iəŋ
支虞魚	485	靈神不要再祝，響鼓不用勤槌。	槌	y
支虞魚	486	若要教子讀，還須父讀書。	書	y

5.5.2. 文字の不統一

二点目は文字の使用が統一されていない点である。同じ意味でも異なる文字を使用しており、明らかに誤字が多い。

21. 蕎麥完不得錢糧，繼崽供不的爺娘。

蕎麥不能用来完成征收的粮谷，过继的儿子不能供养父母。

蕎麥は穀物の税金として納めることができないし、養子は親を養うことができない。

「完不得」と「供不的」における可能補語の「得／的」は文法機能は明らかに同じであるにも関わらず前後の文字が異なっている。統一されていない。

22. 外甥多像舅，夜槩不離娘。

外甥大多像舅舅，夜里的孩子离不开母亲。

甥は大概小父に似るもので、夜の子供は母親から離れられない。

同じく子供を表すのに、上の文のみ俗字「槩」を使っているが、その他の場所ではすべて「崽」になっている。

十九	蟹賄	1713	田不生崽，年年有賣。
十九	蟹賄	1715	栽棕養崽，十年得使。
十九	蟹賄	1716	窮人養嬌崽，富人得人使。

前述の「二十一 早」における「早」が誤字である以外に、別の場所でも誤字が多々見られる。「貢生」によって編纂されたものならこのようなミスが起こるのは考えられない。

十四	尤	1380	紙無足数，卦不抬頭。
十四	尤	1381	太公釣魚，願者上釣。
十四	尤	1382	便宜莫愛，浪蕩難收。
十四	尤	1383	話事莫嘲嘴，做事莫盡頭。

23. 太公釣魚，願者上釣。

太公钓鱼，愿者上钩。

太公望の魚釣り、自ら望む者が釣られる。

こちらは単純なミスであり、前後の韻（頭、収）からみても、「釣」ではなく「钩」の字だとわかる。

- 二 江陽 206 疑人不是賊，網爛不破綱。
- 二 江陽 207 客有客綱，船有船綱。家有家綱，房有房綱。

24. 客有客綱，船有船綱。家有家綱，房有房綱。
 客有客綱，船有船綱。家有家綱，房有房綱。
 客には客の要綱、船には船の要綱、家には家の要綱、部屋には部屋の要綱があるものだ。
 前後からみて、ここでの「船綱」は「船綱」の間違いだと判断できる。

- 三十二 賓遇 2127 一朝天子一朝臣，崽裡計得先年事。

25. 一朝天子一朝臣，崽裡計得先年事。
 一朝天子一朝臣，小孩记得先年事。
 一朝の天子、一朝の臣下。子供はだいふ前のことも覚えている。
 「計得」は「覚えている」という意味なので、「記得」が正しい。

「崽裡」とは子供のことである。これは平江東北郷虹橋方言の特徴である。ここからみても、本資料が収集したのは虹橋方言であることがわかる。更に、筆者が城関で年配者に『又一経』について尋ねたことがあるが、知っているという人はいなかった。

004の編纂者は「虹橋大口堰」とはっきり書いてあり、筆者が虹橋大口堰で調査する時に、何人かの人は『又一経』のことを知っていた。筆者と年齢があまり変わらない虹橋出身の友人が、筆者より『又一経』の中の諺を知っていた。

語例	城関	虹橋	南江	岑川	三聯	伍市
子供	細仔嘖	崽哩	細仔嘖	細仔嘖	細仔嘖	細仔嘖
	si ⁵⁵ ŋa ¹³ tseŋ ⁴	tsai ³⁵ li	sei ⁵⁵ ŋa ¹³ tseŋ ⁴	si ⁵⁵ ŋa ¹³ tseŋ ⁴	si ⁵⁵ ŋa ¹³ tsiŋ ⁴	si ⁵⁵ ŋa ¹³ tseŋ ⁴

張盛開2009 附录：21

5.5.3. 書面語と口語の混同

三つ目は書面語と口語の混同である。これも方言の俚諺に詳しい貢生の作品と思えない理由である。

26. 爺落前頭賣篋夾，崽落後頭叫齒稀。
 父亲在前面卖篋子，儿子在后面说篋子的齿太稀了。
 前で父親は梳き櫛を売っているのに、後ろで息子は梳き櫛の歯が少ないと言う。

27. 阎王老子在間壁，誓愿莫把做飯吃。
 阎王老子就在隔壁，发誓可不能当饭吃。
 閻魔様はお隣にいますので、軽い誓いをご飯にするな！
 誓いを立てる時に、「もし違っていたら死んでもいい」というような誓いがよく出る。しかし、生死を掌る閻魔様がすぐ隣にいる時はこのような誓いを立ててしまうと、本当に死ぬことにつながってしまうかもしれない。これは軽々と誓いをたてるな！という意味の戒めの諺である。

同じく「いる」という意味を表すのに、26では口語の「落」を用い、27は「在」を用いる。更に、同じく「の」を表すのに、28は口語「箇」で29は書面語「的」を用いる。

28. 真箇假不得，假箇真不的。
 真的不能假，假的不能真。
 本物は偽物ではあり得ないし、偽物は本物にはなり得ない。
29. 乖人賺打痴人的錢，痴人置打奸巧人的田。
 老实人赚了呆子的钱，呆子买了奸人的田。
 正直者がアホからお金を儲けた。アホは悪人から田んぼを買った。

同じく完了を表すのに、29や30の前半は口語「打」を用い、後半は書面語「了」を用いる。

30. 喫打茶，粘了牙。開金口，露銀牙。
 喝了茶，粘了牙，开金口，露银牙。
 お茶を飲んだら、歯にくっついてしまった。金の口を開いたら、銀の歯が出てきた。

以上あげた文法現象は、現在の平江方言の口語では普通前者を用いる。平江方言がしっかり話せる地元の人であれば、口語と書面語を混同することは間違いなくないはずである。しかし、博識で、地元方言に詳しい清朝の貢生が混同しているということは不思議なことである。

5.5.4. 小韻の区分けが厳密ではない

『又一経』(001)では小韻の間を○で区分けしているが、押韻の文字がその前の文字と区別していないものがある。即ち、小韻の区分け記号の前後に同じ韻を使っている。しかもこれは単独な現象ではなく、多くの韻でみられる。例えば、2江陽、3支微齊、4支虞魚、5佳灰などがそうである。ここからこの記号が本当に韻を分けている記号なのか疑わしくなる。韻書に詳しいはずの貢生が編纂したものならば、このようなミスはあり得ないものである。

下記にそれぞれの例を挙げる。

三	支微齊	300	老婆易打，奴仆易欺。	欺
三	支微齊	301	家箇打起團々轉，野箇打起滿山飛。	飛
三	支微齊	302	有薑莫削皮，當思毛薑時。	時
三	支微齊	303	富人失打妻，架上換羅衣。	衣
三	支微齊	304	貧人失了妻，一世受孤栖。	栖
三	支微齊	305	○人窮顏色低，衣破狗來欺。	欺
二	江陽	249	敬的父母，逆了君王。	王
二	江陽	254	各人打掃門前雪，休管他人瓦上霜。	霜
二	江陽	255	○情喫開口湯，莫喫皺眉糧。	糧
二	江陽	260	未來休指望，過去莫思量。	量
二	江陽	261	酒醉傷風醒，事過心頭涼。	涼
二	江陽	262	○過了九月重陽，殺猪屠父像閻王。	王
四	支虞魚	417	理之所無。事之所有。信之則有，不信則無。	無

四	支虞魚	418	情可信其有，不可信其無。	無
四	支虞魚	419	寧叫千聲有，莫叫一聲無。	無
四	支虞魚	420	踏破鉄鞋無覓處，得時全不費工夫。	夫
四	支虞魚	421	○男子漢大丈夫，一双兩好世間無。	無
四	支虞魚	417	理之所無。事之所有。信之則有，不信則無。	無
四	支虞魚	477	紙上一点珠，不怕做尚書。	書
四	支虞魚	478	臨乾掘沙井，上陣看兵書。	書
四	支虞魚	479	君子言前莫言後，朝廷奉請不奉拘。	拘
四	支虞魚	480	只因一脚錯，滿盤都是輸。	輸
四	支虞魚	481	○一字有三呼，子孫要讀書。	書
四	支虞魚	482	子孫不讀書，祖字認做租。	租
四	支虞魚	483	屠戶手裡好買肉，秀才門上好教書。	書
五	佳灰	514	○慈不掌兵，義不掌財。	財
五	佳灰	515	只有锅中換水，毛有灶裡抽柴。	柴
五	佳灰	516	信邪不信正，交義莫教財。	財
五	佳灰	517	貧者士之常，士者国之宝。富者怨之積，利者禍之階。	階
五	佳灰	518	明中去，暗中来。	来
五	佳灰	519	銅錢银子传世宝，有福之人善退財。	財
五	佳灰	520	○一興如雷，一敗如灰。	灰
五	佳灰	521	零星不見邸，倒地不成材。	材
五	佳灰	522	賒荒不起利，到手就是財。	財
五	佳灰	523	馬上殺人非為良將，留田欠債不是家財。	財
五	佳灰	524	賺錢莫去，折本再来。	来
八	寒刪覃元咸	808	從儉入奢易，從奢入儉難。	難
八	寒刪覃元咸	809	穿喫兩個字柴米樁頭擔。	擔
八	寒刪覃元咸	810	○在家千日好，出外一時難。	難
八	寒刪覃元咸	811	人不辭路，虎不辭山。人行望地，虎遶高山。	山
八	寒刪覃元咸	812	送牛上寨，放虎還山。	山
八	寒刪覃元咸	813	上山擒虎易，開口告人難。	難

6. 作者についての考察

虹橋人方秉謙編004『又一經全集』の序では「相傳攸久，作者失考」（長く伝わってきたもので、作者は考察できない）と書いてある。しかし彭以達氏は虹橋出身の貢生李映奎の作品であるとしている。どちらの説が本当なのだろうか。筆者は直接的な資料は持っていないため、上述した資料の特徴から本資料の作者について考察してみる。

まずは李映奎という人についてみてみる。下記は清同治の『平江県志』人物伝奇「李应奎」項より引用している。一字異なるが、同じ人物だと考えられる。なぜなら、同書『滋学园四书讲义』の項では「李映奎著」と書いてあるからである。

李应奎 字瓣香，岁贡生。博闻强记，叩以僻典，辄应声答。星卜壬遁，无所不通，下及方言里语，皆条贯其义。所

著《滋学園四書講義》尤一生精力所萃。意在折衷諸家，以漢儒之箋疏，發宋儒之義理，故博而不失之雜。一時推朴學焉。

李映奎、字瓣香、歲貢生である。博識で記憶力強く、辭典で尋ねてもすぐに答えられる。星卜壬遁に関しても知らないものはない。更に方言俚諺まで、すべての項目の意味を理解している。その著書『滋学園四書講義』は一生の学問の集大成である。その趣旨は諸家を折衷し、漢儒の箋疏で宋儒の義理を發するものであり、博識であるが、雜ではない。当時誰もが推奨しかつ学ぶものであった。

『同治平江縣志』卷四十四：413（下線は筆者による）

同書『滋学園四書講義』の項では「李映奎著」と書いてあるため、そちらも引用する。

《滋学園四書講義》七十二卷，《孔孟年譜》四卷，《韻貫》十卷，《滋学園詩草》一卷，李映奎撰。（映奎字瓣香，歲貢生。事見“人物”，《四書講義》乃其一生精力所萃。論、孟每篇、学、庸每张为一卷，首列章義，次入語氣，略如講義式，后来注疏古義，旁及經史子集，并前人別解，間亦附述己意，志在折衷漢宋，以漢儒之箋疏，發宋儒之義理，故虽博而不失之雜，有裨舉子業，其小焉者也。《年譜》考証詳明。《韻貫》發明顧氏、江氏之說，《詩草》一卷，則道光戊戌如都紀行之作也）。

『滋学園四書講義』七十二卷、『孔孟年譜』四卷、『韻貫』十卷、『滋学園詩草』一卷、李映奎撰。（映奎、字瓣香、歲貢生。その詳細は「人物」を参照、『四書講義』は当人の一生の集大成である。論、孟篇毎に、学、庸張毎に一卷とし、まずは章義を挙げ、次は語氣を入れる。講義のような略式である。後に古義を注疏し、經史子集にも触れ、前人の別解も合わせ、間に自分の主張も述べる。その趣旨は漢宋を折衷し、漢儒の箋疏で、宋儒の義理に發する。博識であるが、雜ではない。挙子業（科挙の試験）に役立つことはその小さいほうの貢献である。『年譜』は考証を詳細に行っており、『韻貫』は顧氏と江氏の説を継承し發展させている。『詩草』とは道光戊戌年の如都の紀行の作品である。

『同治平江縣志』卷四十四：540

彭以達氏は李映奎について下記のように記している。

査閱虹橋長慶所保存的《天岳李氏族譜》方知，李映奎字瓣香，生于清乾隆五十六年乙巳十月初六，卒于同治元年壬戌正月初七，（即公元1785年—1862年），享年78岁，系天岳李氏八房長慶黃泥塘人。

虹橋長慶で保存されている『天岳李氏族譜』を見て初めて知ったことである。李映奎、字瓣香。清乾隆五十六年乙巳十月初六に生れ、同治元年壬戌正月初七に没する（即ち紀元1785年—1862年）、享年78歳、天岳李氏八房長慶黃泥塘の人である。

彭以達2011：53

李映奎一生可謂學富五車，除取得貢生之名未見有任何官職。然而在《天岳李氏族譜》上，嘉慶甲戌（1814年）四修和道光己酉（1848年）五修都有李映奎作序其上，尤其道光五修譜在卷首除由他作序外，還有《李氏姓說》四篇，詳細論述李姓源流，以及祭祖祝文范本三篇。在名人如林的李姓中，李映奎以一介窮儒獨領風騷，亦顯其文筆功力。如今映奎先生作古已一百四十餘年，其他著述已無法尋覓，獨稱『又一經』的《韻貫》的手抄本累有發現，可見歷來受到人們珍視。同治平江縣志中稱“《韻貫》發明顧氏、江氏之說”，可見映奎先生亦是在前人基礎上，從事方言俚語的研究整理成果，足以證明越是鄉土的文化，越有強大的生命力。

李映奎の一生は「學富五車」と言えるが、貢生の名を取得したほかにいかなる官職にもついていない。しかし、『天岳李氏族譜』において、嘉慶甲戌（1814年）四回目の編集と道光己酉（1848年）の五回目の編集において、李映奎による序が見られる。特に道光五回目の編集では巻首の李映奎の序以外に、『李氏姓說』四篇あり、李姓の源流を詳しく説明し、祖先を祭祀する祝文の模範文章が三篇ある。有名人が林のように多い李姓において、李映奎は一介の窮儒で指導の地位にあるのはその文筆の強さを示している。今日に至って、映奎先生がなくなってすでに一百四十余年も立つた

め、その他の著述は探しようがない。しかし、『又一経』と言われる『韻貫』の抄本版がよく発見されているということは今まで人々に愛されて来ているということであろう。同治平江県志では「『韻貫』は顧氏と江氏の説を継承し発展させている」と言っており、映奎先生も先人の元で方言俚諺の研究をし、成果を整理したものであることが分かる。これはまさに郷土文化ほど強大な生命力を持っているものだというのである。

彭以達2011：53-54（下線は筆者による）

以上引用した資料から、李映奎は博識で、多才な人である。文筆に優れ、方言俚諺に詳しい。書籍を著し、自分の説も立てているような人である。「注疏古义，旁及经史子集，并前人别解，间亦附述己意」（古義を注疏し、経史子集に触れ、先人の別解にも合わせ、その間に自分の主張も付ける）。まさにこのような人が平江方言の俚諺などを収集し、『又一経』として整理したというのは非常に合理的であるように見える。しかし筆者の考察結果はこのような結論を支持しない。

『又一経』は韻書の体裁をとっており、多くの方言俚諺を集めている。語彙の使用も方言的、口語的であるといえ、語彙にも虹橋方言の特徴を反映している。しかし、反対に、このような欠点もみられる。押韻不当、口語書面語の混同、誤字が多くあり、文字の使用も統一されていない。小韻の区分け記号も役に立っておらず、韻書の体裁に合わないところが多々ある。彭以達氏の記載：「陆续又从几处残本中抄录补齐了头尾，并发现有的传抄本称作《韵贯》，有的称作《滋学园又一经》，但都称是李映奎所著」（断続的にいくつかの残本より欠けていた前後を補充することができた。これらの抄本版の名前には『韻貫』や『滋学園又一経』があるが、いずれも作者は李映奎としている）を除いては、『又一経』が即ち李映奎の著作『韻貫』であることの直接的な証拠は見つかっていない。ゆえに、筆者は『韻貫』を『又一経』と直接関係づけるには証拠が足りないと考えている。しかし、誰かが有名で博識な李映奎の名を借りて資料を収集し、整理して『又一経』にしたという可能性は十分あり得る。

7. 終わりに

本研究は『又一経』における押韻、語彙、諺について考察し、現在の平江方言と比較対照した結果、下記の三点から、この資料は平江方言韻編と言えることが判明した。これは彭以達氏の考えとも合致する。

- ▶ 韻の使用はおおよそ平江方言と一致する
- ▶ 平江方言の諺を大量に使用している
- ▶ 平江方言の語彙を大量に使用している

しかし下記の現象を踏まえると、文字知識が豊富で、歴代の韻書の形式や内容を熟知している貢生の著作であるというには疑わしい。

- ▶ 文字の使用が統一されていない
- ▶ 小韻の区分けが厳密ではない
- ▶ 口語と書面語の混同
- ▶ 明らかな誤字がある

なお、彭以達氏が見た原本が本当なら、誰かが『又一経』を整理し、編纂したが、名前として貢生李映奎の名を借りた可能性がある。ゆえに、『又一経』の作者についてはさらなる研究をしないと結論を下すことはできないと筆者は考えている。

参考文献：

- 黄传惕 主编 2011 「滋学園又一経」. 平江県非物質文化遺産叢書『平江話』: 134-200 湖南省越来越好印務有限公司
- 彭以達2011「滋学園又一経」序,『古罗文存』: 51-54. 中国文史出版社
- [(清)張培仁等修;(清)李元度纂] 2002.『同治平江縣志』江蘇古籍出版社。中國地方志集成, 湖南府縣志輯
- 張盛開2009『漢語平江方言の音韻及び文法の系統的研究』東京外国語大学地域文化研究科博士論文

使用資料：

- 001 作者、書名不明『又一経』?
- 002 彭以達 校刊 張長江 抄录 2009 『滋学園又一経』
- 003 黄传惕 主编 2011 「滋学園又一経」. 平江県非物質文化遺産叢書『平江話』: 134-200 湖南省越来越好印務有限公司
- 004 方秉謙 編 『又一経全集』

平江方言韵编《又一经》

提 要

关键词 方言 俗谚 押韵 词汇

平江方言韵编《又一经》为一本手写旧体书，该书按韵书形式，收集了很多平江地区的方言俗谚。全篇约37000字，分句后为2655小节。按48个韵部排列。本文对其内容进行考察，通过对语音（押韵）、词汇、语法、方言俗谚、用字情况等各方面的分析，来查证书中的平江方言要素。最后再从本资料的特征来推测作者的相关信息。

本韵编为已故湖南省平江县文史专家彭以达氏2004年所赠，共71页，3万字左右，前后残缺，不能判断其书名与作者。之后，彭以达氏制作私家版《滋学园又一经》，还作序，对其作者及书名进行了考察，得出作者为乾隆时期的平江县贡生李映奎的结论，其名称为《滋学园又一经》。序中指出“映奎先生的方言《韵贯》，看似全是方言土语，但包含了作者对人生的感悟，对人情的练达，对处世的包容。除了用音韵表明平江的方言读音外，还保存了大量方言词语中的字词，而有些字是现代任何字典、词书都无法查到的。确实为平江地方文化的经典之作，故仍以《又一经》名之”。

本研究通过进一步通过整理其押韵、用词、谚语情况，并与现在的平江方言进行对比，根据以下三点得出本资料可以算平江方言韵编，与彭以达氏所说相符。

1. 押韵规则基本上符合平江方言

鼻音韵尾-m, -n, -ŋ 通押、入声韵尾-p, -t, -k 通押

2. 使用大量的平江方言俗谚

三个女子家，一乘破风车。 人要忠心，火要空心。

3. 使用了大量的平江方言词汇

崽（儿子）、爷（父亲）、郎（女婿）、新小娘（新娘子）、媒人公（媒人）等

但是有关本资料的作者，笔者并不同意彭以达氏的结论。

很多资料都表明李映奎博学多才，知识丰富，文笔功力很高，熟悉方言俚语。著书立说，能做到“注疏古义，旁及经史子集，并前人别解，间亦附述己意”，正是这样的一个人，收集并整理《又一经》，好像非常合理。但是笔者考察出的结果，却不支持这样的结论。

虽然如上所述《又一经》按韵编排，收集了很多方言俗谚，其中用词也算方言化和口语化，词汇方面也呈现一些平江虹桥方言的特征（崽裡）。但是反过来，亦有很多缺点：

1. 押韵不当之处多见：督、夫、書、兄相押

2. 方言口语书面语相混：处所的文语“在”与口语“落”同用

3. 错别字明显：钩写成鈎，綱也成網

4. 用字不统一：补语结构“得”与“的”并用

5. 分韵记号○没起到分韵作用，不合韵书体裁：多处分韵记号前后用同一个字

除了彭以达氏所说“陆续又从几处残本中抄录补齐了头尾，并发现有的传抄本称作《韵贯》，有的称作《滋学园又一经》，但都称是李映奎所著”之外，并无直接证据表明《又一经》即李映奎所著《韵贯》，故此笔者认为将《韵贯》直接跟《又一经》联系起来还缺乏证据。但不排除有人收集了平江方言俗谚，并借用李映奎之名整理为《又一经》。所以笔者认为关于《又一经》的作者，还需要更深一步进行研究才能下结论。